



## CONTENTS

- 第39回日本原生動物学会(佐賀)のご案内(第1報)  
奨励賞を受賞して
- 第12回国際原生動物学会大会参加記  
関連の学会情報
- 若手の会コーナー

### 第39回日本原生動物学会(佐賀)のご案内(第1報)

第39回日本原生動物学会は以下の要領で開催する予定です。佐賀での開催は初めてのことで、会場は歴史ロマンあふれる吉野ヶ里遺跡のすぐそば、田園風景に囲まれた緑豊かな西九州大学です。今回は、特別講演者として原生動物の分類を精力的に行っているオーストリアの W.フォイスナー教授に来ていただくことになりました。大変興味深い話が聞けるとおもいますので、会員の皆様には奮ってご参加くださいますようお願いいたします。

大会長: 高橋 忠夫(西九州大学)

会期: 2006年11月17日(金)~19日(日)

会場: 〒842-8585 佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎 4490-9  
西九州大学 第1視聴覚教室

発表: 一般口演は口頭発表とポスターの予定です。

特別講演: ウィルヘルム・フォイスナー教授(ザルツブルグ大学)

フォイスナー教授のホームページは下記のとおりです。

[http://www.zoologie.sbg.ac.at/people/foissner\\_home.htm](http://www.zoologie.sbg.ac.at/people/foissner_home.htm)

大会事務局: 〒842-8585 佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎 4490-9

西九州大学健康福祉学部健康栄養学科生物学生物学研究室

第39回日本原生動物学会事務局 久富 裕子

TEL: 0952-52-4191 FAX:0952-52-4149

e-mail: Yuko-h@nisikyu-u.ac.jp

### 奨励賞を受賞して

奈良女子大学理学部生物科学科 有川幹彦

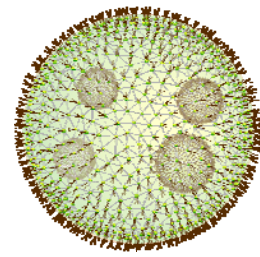
今回、日本原生動物学会奨励賞を受賞し、第38回日本原生動物学会帯広大会にて表彰していただきました。本賞は、従来の日本原生動物学会賞に加えて、昨年より新たに設けられた賞で、若手会員の研究活動を活性化させ、今後の飛躍を奨励することを目的としたものです。世紀の大発見をしたからではなく(していませんが)、生命現象の解明に傾倒し学問に邁進する姿勢や、原生動物学および原生動物学会に対する貢献度、更には日々の生活態度(?)などが評価されての受賞であり、今後の学術活動の質の向上と益々の発展を奨励し、研究者としての大成を希っての表彰であると理解しています。この度、このような名誉ある賞を受賞することができましたのも、多くの先生方の懇切なる御指導と格別なる御厚誼、研究室同志の叱咤激励、そして家族の惜しみない協力と暖かく深い理解の賜物であると心より感謝し、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

思い起こせば今から10年前、池の水を観察する機会のあった私は、1滴の水の中で動き回る微生物たちを見て衝撃を受けました。「こ、これが300年前にレーウエンフックが覗いた世界か!!」とは思っていませんでしたが、顕微鏡の視野いっぱいに広がるその小さな世界は、それまで平々凡々と生きてきた私に未知に対する知的好奇心を抱かせ、原生動物を材料として生命現象の真理を探求する研究の世界に飛び込む動機付けに十分たるものでした。「生命の最小基本単位は細胞である」という細胞説が提唱されて以降、細胞であると同時に生命でもある原生動物は、細胞生物学の目覚ましい発展に大きく貢献してきました。私の10年間の研究人生においてもまた、原生動物は大きな役割を果たしてくれました。原生動物の存在が、私に知る意欲と解る満足を与え、新たな探究心と好奇心を育み、私の研究人生にいくつもの驚きと発見をもたらしてくれました。研究対象である原生動物そのものが、研究者としての私の良評価に寄与するところが非常に大きいのです。登山家ジョージ・マロニーは、なぜ山に登るの

か?との問いに「そこに山があるからだ。」と答えて名を残しました。私は、なぜ原生動物を研究するのか?との問いにこう答えたい。「それらが生命と呼べる細胞だからだ!」と。「細胞の理解なくして生命の理解はありえない!」と。これらの言葉が偉大なる原生動物学者・有川幹彦の名言として原生動物学史に残…らずとも、後世に長く語り継がれ…らずとも、今回の受賞を大変光栄に思うとともに、いただいた栄誉に満足することなく、また日本原生動物学会奨励賞受賞者の名に恥じぬよう、これからもより一層の努力を重ね、研究者としての自己を高めて、生命現象の解明と理解に貢献できるよう、精一杯頑張っていきたいと思えます。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、今回の奨励賞受賞を記念して作成した「奨励賞の歌」をここで……………

え? 字数制限? いや、しかし、せっかく素晴らしい歌が出来……………



山口大学大学院理工学研究科自然共生科学専攻 博士後期1年  
藤島研究室 児玉 有紀

私の発表は学会の最終日だったので、会期中はずっと緊張した状態が続いていました。今回は初めての国際会議で口頭発表ということで、ホテルに戻ったあと、学会の休憩時間、ツアーのバスの中でも練習する毎日が続きました。そしていよいよ最終日を迎えました。私が発表を行った細胞内共生のセッションは立ち見席ができるほどの賑わいでますます緊張し、発表している間はスライドの方を見たままで、後ろを振り返ることができませんでした。発表後、Klaus Heckmann 教授や Hans-Dieter Görtz 教授から激励とお誉めの言葉をいただき、とても感激しました。特に、Heckmann 教授にお誉め頂いた時は嬉しさのあまり涙が出てしまいました。長かった学会が終わり、あとは Farewell パーティーを残すだけになりました。学会が終わったあと、ホテルに戻り荷造りをしていたのでパーティーの開始時間に遅れそうになり、慌ててパーティー会場に向かいました。席が空いておらず、案内されたのが大会長の Ming Li 教授等と同じテーブルだったので、遅刻せずに行けばよかったと後悔しました。おいしそうな中華料理がテーブルに並び、最終日なのでたくさん食べて帰ろうと思っていた時に、予想外の出来事が起きました。Best Presentation Awardの受賞者4名のうちの一人として、私の名が呼ばれたのです。私はそのような賞があることも知らなかったのが何が起こったのか分からない状態で前へ出ました。Ming Li 教授から立派なトロフィーを頂きました。あの時の感動は忘れられません。今まで研究に専念した努力が報われたことにとっても喜びを感じました。4年後にブラジルで開催される会議でも今回と同様の感動が得られるように、研究をさらに発展させたいと思っています。

最後になりましたが、日本原生動物学会から学会参加費の助成金を頂き、旅費の大部分を補うことができました。大変感謝しております。この場をお借りして御礼申し上げます。



受賞のトロフィーを持つ筆者と高橋三保子学会長

## 第12回国際原生動物学会(広州)大会参加記

広島大学理学部 中原 美保

第12回国際原生動物学会が、2005年7月10日～15日、中国南部にある広東省広州市で開催された。広州は広東料理などが有名で、日本からも直行便がある華南最大の都市であり、気候は温暖で四季を通して花が見られ花城の別名がある。学会は市内中心部から少し離れた南方医科大学が会場となり、建物は新しく設備も充実していた。学会は10日の開会式と研究発表にはじまり、13日の広州1日観光ははさんで、11-12、14日に研究発表があった。14日の夜は閉会式の後、送別晩餐会となった。15日は市内観光であったが、時間の都合で参加できなかった。

研究発表は合計4日間行われ、内容が、細胞生物学全般、生態学、遺伝学および生化学、系統・分類および進化、寄生性原虫の5つのカテゴリーに分けられていた。私は、ミドリゾウリムシに共生する藻類の系統・分類が専門であるが、自分ももっとも興味のある系統・分類および進化の会場の発表を主に聞いた。発表は繊毛虫に関する内容が多かったが、藻類に関する発表もいくつかあった。口頭発表の進行は大きな混乱はなかったが、プログラムと実際の発表が異なるものがいくつかあった。このため、プログラムを頼りに会場を移動しても目的の発表が終わっているものが多かった。ポスター発表は建物1階のロビーが会場になっていた。自分自身はポスター発表を行い、何名かの研究者と研究内容について有意義な議論をすることができた。ただし、ポスター発表の時間が特別に設けられておらず、聞きたいポスターの発表者が不在であることが多かった。

参加者は開催国である中国が一番多く、学会前の日中間の情勢の影響で海外からの参加者が例年よりも少ないということを知ったが、韓国や日本のほか、アメリカやドイツなど欧米からの参加者も多かった。広州観光では博物館などを訪れ、夜のクルージングでは夜景を楽しむことができた。限られた時間ではあったが広州を堪能できた。

さて、中国での滞在数日にして周囲の人から「(広州の街に)なじんでいる」と指摘された私であるが、確かにレストランのスタッフに韓国語で声を掛けられるなど思い当たるふしもあった。食事はいくら心配ではあったが、おいしい料理が多く「食は中国にあり」を体感できた。

最後に、この学会は日本原生動物学会から助成を受けることで参加することができた。この場をかりて感謝申し上げたい。

まず、はじめに、第12回国際原生動物学会へ参加する援助を与您にいただき、本当に有り難うございました。今回、学会参加記の依頼を頂きましたので、稚拙な文章ではありますが、私が中国で得た経験に付いて述べさせていただきます。

今回、私は口頭で発表を行い、また、大会期間中に何度か外国の方と話す機会にも恵まれました。全体として、英語で会話した量は極わずかでは有りましたが、自分の英語力の不十分さを改めて認識させられました。とりわけ、日常のコミュニケーションにおいて「聞く」という事の難しさを痛感しました。そして、「もっともっと単語を覚えなければ！もっともっと英語を耳にしなければ！」と誓った次第です。一方、理解不十分ながらも、世界各国の研究を聞き、見たことや、自分の研究を聞いてもらったことが、研究を進めていく大きなやる気を与えてくれました。

また、初めての海外と言うことで、文化が異なるという事の意味も実感してきました。広州と言う街は、一言で言うと、非常に騒々しい街です。また、街や人のいたるところからエネルギーがにじみ出ているようでもありました。確かに、このエネルギーを体感すれば、ここ数年の中国の大幅な経済発展も納得します。その一方で、中国の抱える地域依存的な貧富の格差も明らかでした。中心部では、筍のように巨大高層ビルが乱立していましたが、空港と学会会場の間にある郊外地域は、時間が止まっているような光景でした(昭和30年代の日本と形容する方もおられました)。

先に書いたことは私が中国で体験したことのほんのわずかです。とにかく、私にとってこの国際学会への参加は非常に有意義でした。目にしたもの、聞いたもの、感じたもの全てが新鮮で、様々なことを学んだと思います。これからも、できる限り国際学会へ参加していこうと考えています。

写真は広州(おそらく)珠江からの夜景です。



私は、2005年7月10日から14日に中国広東省広州市で開催された第12回国際原生動物学会議に、日本原生動物学会からの派遣費助成を受けて参加致しました。

7月10日の午後の便で関西国際空港から広州新白雲国際空港へ向かいました。空港からホテルに向かうバスで外の景色にまず驚かされました。たくさんの荷物を載せきれない程に積んだバイクや、クーラーがないのか窓を開けて走る満員のバス、無理矢理に車線変更する車、ネオンをきらきらと光らせたレストランや病院など、何もかもが目新しく思わず見入っていました。

私はポスター発表でした。ポスターの発表者数が少なかった為か、ポスターセッションの時間が定められていなかったため、コーヒープレイクの時間に多くの方がポスターを見てまわっていました。私のポスターも何人かの方に興味をもって見ていただくことができましたが、いざとなると全然言葉が出てこず、あまり積極的に説明できなかったように思いました。自分の英語力のなさは分かっていたつもりでしたが、自分の研究を国外の方に少しでも興味をもって見てもらうことや、こういった場で自分が積極的になる為にも語学力をつけることが必要であることを今回の学会で痛感しました。

7月13日には、広州市内のバスツアーが行われました。中山記念堂や陳氏書院など、広州の歴史的な名所を見て回り、おいしい食事を食べたり、夜の珠江クルージングで美しい広州の夜景を見たりと盛り沢山の内容でした。その後も順調にプログラムが進行し、学会の最後にはホテルの広間でFarewell Banquetが盛大に行われました。

この学会では、申込みの手続きの時からメールのやりとりが上手くいかなかったり、泊まったホテルのフロントの人とうまくコミュニケーションがとれなかったり、パスポートをなくしかけたりと、トラブルも色々あって決して順調にすべてが進んだわけではなかったのですが、このように二度とないような様々な体験をすることができました。初めての国際学会であるだけでなく初めての海外渡航で、英語にも自信がなかったで行く前はとても不安でしたが、今回この学会に参加したことは、私にとってとても貴重な経験になりました。

## 関連の学会情報

### 第7回アジア繊毛虫会議(VII Asian Conference of Ciliate Biology)

会期:2006年7月16-20日、場所:中国武漢市 水生物学研究所、参加費:一般 US \$400、学生US \$240、発表締切:2006年4月30日(Young Scientist Awardに応募する場合は3月31日) ホームページ:<http://www.ihb.ac.cn/accbio/index.htm>

2006年ISOP(International Society of Protozoologists)大会、第9回日和見感染原虫会議(The IX International Workshop on Opportunistic Protists, IWOP-9)との共同開催として行われます。会期:June 20-24, 2006年7月20-24日、場所:ポルトガル・リスボン市、ホームページ:<http://www.uga.edu/~protozoa>

第11回国際寄生虫会議(International Congress of Parasitology, ICOPA XI)、会期:2006年8月6-11日、場所:イギリス・グラスゴー市、発表締切:2006年1月15日、参加費:一般 £350、学生 £200、ホームページ:<http://www.icopa-xi.org>

第11回ヨーロッパ繊毛虫会議・第5回ヨーロッパ原生動物学会議(XI European Conference of Ciliate Biology and V European Congress of Protozoology)、会期:2007年10月2-7日、場所:ロシア・サンクトペテルブルグ

第13回国際原生動物学会議(International Congress of Protozoology, ICOP XII)、会期:2009年、場所:ブラジル

☆「若手の会 in 帯広畜産大学」を終えて☆

若手研究者自身が盛り上がり、先生方に挑戦する場として若手ワークショップを企画しました。若手研究者だからこそ生まれる疑問、若手の研究者の発表だからこそ聞ける質問があったかと思えます。発表者を困らせる質問等を期待していましたが、学生さんからの質問が少なかったように思えます。若手研究者が主体になり、盛り上げていく場として若手の会があります。実験方法について詳しく知りたい、なぜその現象に注目して研究を続けているのか、その研究の将来性等、どんな質問でも結構です。次回はぜひ、学生さんが積極的に討論に参加していただけることを期待しています。また、先生方の温かい目がなければ、そして厳しいご質問・ご助言がなければ、成功していなかったと思えます。

今回のワークショップでは幅広い分野でのお話を拝聴することができ、大変貴重で、有意義な時間を過ごすことができました。原生動物学会員ではない方をワークショップに引きずり込むという半ば強引なところもありましたが、発表者の方々、快く発表を引き受けてくださり、本当にありがとうございました。また、発表者をご推薦してくださった先生方、ご協力に感謝しています。

若手の会に寄付をしてくださった先生方がたくさんいらっしゃいました。若手の会には先生方に支えられているのだとつくづく感じました。最後に、会場設営等を快く引き受けてくださった帯広畜産大学のみなさま、本当にありがとうございました。

★日本原生動物学会若手の会 第5回大会★

若手ワークショップ in 帯広畜産大学

高橋利幸 広島大学大学院理学研究科

原生動物ミドリゾウリムシに対するアクリルアミドの毒性

久保雄昭 岡山理科大学理学部

マクロアレイ解析からみたクラミドモナスの有性生殖に関する遺伝子発現プログラム

太田尚志 石巻専修大学理工学部

海洋少毛類繊毛虫の細胞分裂周期と増殖能

遠藤裕子 東北大学大学院農学研究科

*Strombidium conicum* の chloroplast 取り込み観察法と encystment 誘導に関する研究

末友靖隆 由宇町立ミクロ生物館/神戸大学大学院自然科学研究科

世界初の原生物館 由宇町立ミクロ生物館のすべて

☆フォトコンテスト審査結果☆

最優秀作品

有川 幹彦 (高知大・医・循環制御) 『激写! 電子顕微鏡は見た! ゾウリムシの中に懐かしのあのキャラが!!』



今年度のフォトコンテストは、応募作品が大変少なく、とても寂しかったように思えます(初代若手の会会長と現若手の会会長の戦いでした)。現象をじっくり観る、現象を写真に収める、これは研究の基本です。来年度の学会においてもフォトコンテストを開催する予定です。年齢制限なしです。若手の学生さんから年配の先生方、ぜひ子どもたち(原生動物)のかわいいショット、お宝写真を学会員のみなさまに披露していただけないでしょうか。豪華商品をご用意していますので、奮ってご応募ください!!

★若手の会ロゴマーク決定★

一昨年の山口大会にて、若手の会ロゴマークの募集を行った結果、次のロゴマークに決定しましたので、ご報告します。これから、若手の会のシンボルとして、多方面において活用する予定です。



私はこれに勝るロゴマークを知らない

まずは線。外周線は適度に太さをもち、それでいて圧迫感がなく見た瞬間にすっと溶けるように目に馴染む。比べて内周線はやや細く存在感は薄いながらも、周縁部の文字と中央のシンボルとを隔てる重要な役割をさり気なくこなしている。次に、周辺部の文字だ。通常、ロゴマークの周辺部の文字なんて誰も何の期待もしない。しかし、この作品の文字はどうだ。フォントは Arial で、シンプルに書かれていながらも、2本の線に挟まれて、しっかり力強くアピールしているのではないか。しかも中央のシンボルを引き立てながら、このような味のある文字はなかなか見られない。そして中央のシンボルは Young Protozoologists の頭文字である Y と P を流れるようにつないでいる。巧みな技だ。さらに力強い直線と柔らかい曲線とを使い分けることにより、全体的に優しさをかもし出す温かい作品に仕上がっている。白の背景に黒の線を使うことにより、派手さは控えめになっているが、その分、ハイコントラストを得ており、ロゴマークにメリハリがついている。さらに白と黒の両方に共通するグレーのグラデーションを一部に取り入れることによってコントラストの美を際立たせている。実に上手い。忘れてはならないのが「SINCE 2001」のワンポイントだ。小さめのフォントサイズで遠慮ごみではあるが、日本原生動物学会若手の会の歴史を感じさせる絶妙な仕事をしている。いや、これには参った。さすがは構想2時間、製作1時間の集大成。どこを取っても何ひとつ文句のつけようのない、素晴らしい作品である。私はこれに勝るロゴマークを知らない。(作成者 兼 自画自賛者: 高知大・医・循環制御 有川 幹彦)

☆若手の会2005年度決算報告☆

1、収入

前年度からの繰り越し 31,461円

若手の会予算 20,000円

計 51,461円

2、支出

記念品作成費 18,500円

若手ワークショップ要旨集作成費 1,986円

ロゴマークシール作成費 1,000円

通信費 1,440円

計 22,926円

★若手の会メンバー★

西原絵里 (兵庫県立大学大学院)

三好孝和 (東北農業研究センター)

山田周平 (神戸大学大学院)

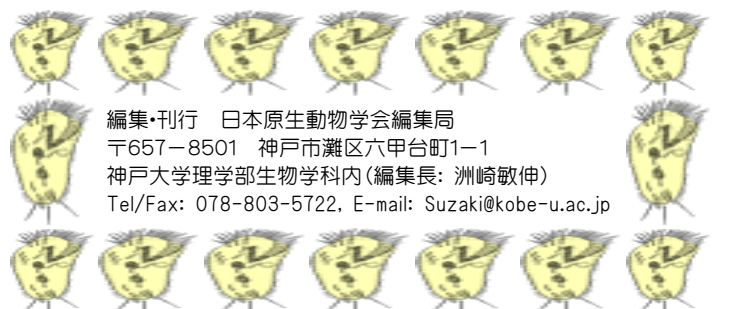
熊谷朋子 (宮城教育大学)

今年度の反省を生かし、来年度も様々な企画を準備したいと思います。来年度の若手の会に対するご意見等がありましたら西原までよろしくお願ひします。

若手どうしのネットワークをさらに強固にするため、ただいま「若手研究者の連絡網」を作成中です。一大学(一研究室)からひとり、若手の会から若手研究者へ連絡を伝えていただくポジションとして協力していただく予定です。原生動物学会だけではなく、様々な場で活用していきたいと考えております。ご協力よろしくお願ひします。

また、若手の会では運営を手伝ってくださる大学院生、学部生を随時募集しております。

お問い合わせは西原(r104o009@stkt.u-hyogo.ac.jp)までよろしくお願ひします。



編集・刊行 日本原生動物学会編集局

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学理学部生物学科内(編集長: 洲崎敏伸)

Tel/Fax: 078-803-5722, E-mail: Suzaki@kobe-u.ac.jp